

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 翻訳批評

山岡洋一

一 翻訳は、日本語だ

一 土屋政雄訳カズオ・イシグロ著『日の名残り』

土屋政雄の訳を読むと、これが翻訳なのかという感想をもつ。翻訳とはこういうものだという常識をつくがえす翻訳なのだ。こうもいえる。土屋政雄は訳しているのではない、原文を読んで原著者になりきり、日本語で小説を書いているのだ。訳すのではなく、書く。これが土屋訳の特徴だ。この名訳を支えているのは、圧倒的な日本語力である。翻訳というと、外国語を使う仕事だと思われているが、実際には何よりもまず、日本語を使う仕事なのだ。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳は、日本語だ

一 土屋政雄訳カズオ・イシグロ著『日の名残り』

最近、土屋政雄の翻訳について話す機会があった。『日の名残り』の「プロローグ」の原文と訳文をあらかじめ読んでもらい、その楽しみ方を話していった。以下はそのときに話した内容、話すつもりで十分には伝えられなかった点をまとめたものである。

翻訳を職業にしている以上、当然といえば当然のことですが、すぐれた翻訳家が訳した本をよく読んでいます。何かのヒントが得られないかと考えて、原文と訳文を見比べていくことも少なくありません。そうやって読んだ翻訳書は数百冊あります。そのなかで、これは名訳だと思えるものはそう多くないのですが、今回紹介する土屋政雄訳の『日の名残り』は、文句なしの名訳、たぶん、ベスト5に入る名訳だと考えています。

土屋訳の「プロローグ」を読んで、これが翻訳なのかと驚いた人が少なくないのではないのでしょうか。翻訳というより、土屋政雄が日本語で書いた小説なのではないかと。そういう感想をもったのであれば、土屋政雄の翻訳の特徴を正確にとらえたのだと思います。翻訳の匂いがしない翻訳、すこし角度を変えて言い換えるなら、翻訳とはこういうものだという常識をつくがえす翻訳、これが土屋訳の特徴なのです。こうもいえます。土屋政雄は訳しているのではない、原文を読んで原著者になりきり、日本語で小説を書いているのだと。訳すのではなく、書く。これが土屋訳の特徴です。

職業柄、翻訳書を読むときはたいいてい、翻訳の質は高いか、どのようなスタイルや技法が使われているか、といったことを考えています。純粹に読書を楽しむのではなく、分析し、研究する対象として読むという姿勢がいつもついてまわるわけです。ですが、『日の名残り』の場合は、数行読んだだけで、そういう賢しらかな姿勢は吹き飛んでしまいます。『日の名残り』の世界に引き込まれ、魅力に酔いしれる。

本を読みおわってしばらく経つと、こんどは、どういう方法を使えばこれほど素晴らしい翻訳ができるのか、猛烈に知りたくなります。翻訳書というものは原著が出版されているわけですから、原著と訳

書を比較しながら読んでいけば、翻訳家がどのような方法を使ったのかは、少なくともある程度まで分かる仕組みになっています。出発点である原文と到着点である訳文とがあるわけですから、翻訳の方法や技法は秘密でも何でもなく、公開されているといえます。だから、一度は吹き飛んでしまった分析と研究の姿勢を取り戻して、もう一度、読んでみようという意欲がわいてきます。

以下ではそのような姿勢で読んだ結果を紹介していきます。

本書の「プロローグ」は、「一九五六年七月、ダーリントン・ホールにて」という副題がついており、冒頭はこうなっています。

ここ数日来、頭から離れなかった旅行の件が、どうやら、しだいに現実のものとなっていくようです。ファラディ様のあの立派なフォードをお借りして、私が一人旅をするーもし実現すれば、私はイギリスで最もすばらしい田園風景の中を西へ向かい、ひょっとしたら五、六日も、ダーリントン・ホールを離れることになるかもしれません。(土屋政雄訳カズオ・イシグロ著『日の名残り』ハヤカワ epi 文庫、9ページ)

It seems increasingly likely that I really will undertake the expedition that has been preoccupying my imagination now for some days. An expedition, I should say, which I will undertake alone, in the comfort of Mr Farraday's Ford; an expedition, as I foresee it, will take me through much of the finest countryside of England to the West Country, and keep me away from Darlington Hall for as much as five or six days. (Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*, Vintage International, p. 3)

わずかこれだけの文章で、読者を物語の世界に引き込むという点で、見事な文章ではないのでしょうか。主人公の立場がはっきりし、物語の大筋も予想でき

るようです。それだけでなく、これだけをみても、土屋訳の特徴がじつによくあらわれていると思えます。自分ならこの原文をどう訳すかと考えてみると、特徴がよく理解できるはずですが、自分で訳そうとすると、たとえば、*preoccupying my imagination* の部分でひっかかるはずですが、どう訳せばいいのかと考えていくとき、たいていは、*preoccupy* の訳語をどうするか、*imagination* の訳語をどうするかと考えるはずですが。辞書を引いて、そこに書かれている訳語を組み合わせてみる。そう考えていったとき、「頭から離れなかった」という訳が出てくるのでしょうか。出てくるはずがないと断言しても、そう乱暴ではないのではないかと思います。

はっきりしているのは、どういう訳語を使うべきかとは考えていないことです。どういう訳語なら文脈にぴったりかとも考えていないのです。適切な訳語、正しい訳語、文脈に合った訳語などなどは、考えていない。そもそも「訳語」を考えていては、こういう言葉は出てこないのだと思います。ではどうして、「頭から離れなかった」という言葉が出てくるのか。「訳語」を考えるのではなく、「意味」を考えているからだだと思います。それも単語の単位ではなく、もっと大きな単位で、少なくとも *preoccupying my imagination* という塊で、実際にはもっと大きい塊で、たとえば *that has been preoccupying my imagination now for some days* という塊で意味を考えているから、こういう言葉が出てくるのだと思います。

同じことは、*I really will undertake the expedition* を「旅行の件が……現実のものとなる」と表現し、*in the comfort of Mr Farraday's Ford* を「ファラディ様のあの立派なフォードをお借りして」と表現している点にもいえます。たとえば、*in the comfort of* の訳に困って英和辞典を引いたとすると、*comfort* の項には「快適」とか「安楽」といった訳語しか出てきません。これらの訳語を見て、「あの立派な」という表現が浮かんでくるとは考えにくいと思います。意味を理解したからこそ出てくる言葉だといえます。

翻訳の技法という観点に立つと、「訳語」ではなく「意味」を考えるという点は、決定的に重要です。センテンスを単語の単位に分解し、それぞれに訳語をあてはめていくという訓練をわたしたちはみな、学校英語の英文和訳で受けています。この方法で訳すときに使える訳語が並んでいるのが、英和辞典です。ですから、翻訳にあたって訳に困ると、英和辞

典を引いて訳語を探すという風に、わたしたちはみな、条件付けられているのです。ここから脱却しなければ、本当の翻訳はできない。読者に感動を与えられる翻訳、読者にしっかりと意味を伝えられる翻訳はできない。土屋政雄訳『日の名残り』を読むと、最初の数行で、翻訳の要諦ともいえるこの点を実感できるはずですが。

次の数行をみていきましょう。

この旅行の話は、もともとファラディ様のまことにご親切な提案から始まったことです。二週間ほど前、私が読書室で肖像画のほこりを払っていたときのことでした。脚立にのぼり、ちょうどウェザビー子爵の肖像画に向かっておりますと、ファラディ様が棚にもどす書物を数冊、腕に抱えて入ってこられました。私を認め、ちょうどよかったという表情で、「やっと決めたよ。八月九月は、五週間ほどアメリカへ帰ってくることにした」と告げられたあと、書物をテーブルに置き、長椅子に腰をおろし、脚を伸ばして私を見上げながら、こう言われたのです。(同上、9～10 ページ)

The idea of such a journey came about, I should point out, from a most kind suggestion put to me by Mr Farraday himself one afternoon almost a fortnight ago, when I had been dusting the portraits in the library. In fact, as I recall, I was up on the step-ladder dusting the portrait of Viscount Wetherby when my employer had entered carrying a few volumes which he presumably wished returned to the shelves. On seeing my person, he took the opportunity to inform me that he had just that moment finalized plans to return to the United States for a period of five weeks between August and September. Having made this announcement, my employer put his volumes down on a table, seated himself on the *chaise-longue*, and stretched out his legs. It was then, gazing up me, that he said. (Ibid)

ここでとくに目立つのは、原文では間接話法になっているファラディの言葉を直接話法にして訳していることでしょうか。これも土屋訳の特徴のひとつですが、原文の表面から自由自在に飛躍して、物語の世界を築いていきます。翻訳という観点からは、この種の飛躍は冒険です。失敗すれば、目も当てられない悲惨な訳になりかねません。ですが、土屋訳は、原文が伝える意味を過不足なく日本語で伝えているし、いったんこの訳を読めば原文から他の訳が思いつけなくなるほど、物語の世界にぴったりです。土屋政雄が原著者になりきり、日本語で小説を書いているからなのでしょう。

この部分にも、単語ごとに訳語を考えていく方法では思いつけるはずがない表現がいくつか使われています。たとえば、「ちょうどよかったという表情で」はどうでしょう。これにあたる原文は、**he took the opportunity** でしょう。試みに英和辞典の **opportunity** の項を引いてみると、**take the opportunity to do sth** に「機会をとらえて～する」といった訳がついていますが、もちろん、「ちょうどよかったという表情で～する」などとは書かれていません。土屋政雄が英和辞典の訳語やその類語から適切な訳語を探すという方法をとっていないことが、この表現からも実感できるのではないのでしょうか。

この部分ではもうひとつ、「ファラディ様」という言葉にも注目したいと思います。原文を読むと、**Mr Farraday** 以外に、**my employer** と **he** が使われています。これは英文では当然のことです。英文では同じ言葉を繰り返すのを嫌うので、別の言葉に言い換えたり、代名詞、関係代名詞などを使ったりします。ここで、原文の **my employer** にたとえば「私の雇い主」という訳語をあて、原文の **he** に「彼は」という訳語をあて、「私の雇い主が棚にもどす書物を数冊、腕に抱えて」、「彼は私を認め、ちょうどよかったという表情で」とするとどうなるのでしょうか。もうそれだけで、いかにも翻訳だという印象になります。これが翻訳なのかと驚く人はいなくなるはずです。日本語で書くのであれば、そうは書かないからです。この点でも、土屋政雄は訳すのではなく、書く姿勢をとっていることが分かります。

もちろん、英語の言い換えには情報を追加していくという機能もあります。最初に **Mr Farraday** と書き、つぎに **my employer** と書くことで、この人物がどういう立場なのかを明らかにしているのです。翻訳にあたっては、その点を考慮して「私の雇い主」と訳すべきだという見方も成り立ちます。ですが、土屋政雄は原文の **my employer** を無視したわけではありません。原文にあるこの情報をさまざまな表現で伝えています。たとえば、「ミスター・ファラディ」でも「ファラディ氏」でも「ファラディさん」でもなく、「ファラディ様」という表現を使っています。原文の **Mr Farraday** には主人公との関係を示す情報がないので、まずは **he** ではなく **my employer** と言い換える必要があったのでしょうか。「ファラディー様」という表現にはこの情報がかなりの程度まで含まれています。土屋政雄は原文の **Mr Farraday** とその言い換えである **my employer** とを合わせて、さらに原文にある他のさまざまな情報も考慮したう

えで、「ファラディ様」と書いたのであって、**my employer** という言い換えを無視したわけではないのです。

もう一か所、10 ページほど後ろの一節をみてみましょう。

あとは、もう、ファラディ様に再度お伺いするしかないように思われました。もちろん、二週間前のご発言がその場の思いつきにすぎず、いまでは考えが変わっておられる可能性もあるわけですが、過去何カ月かの私の観察によれば、召使泣かせの最たるもの、あの「気まぐれ」という悪癖は、ファラディ様にはありません。前回同様、私の自動車旅行に大賛成し、もしかしたら「ガソリン代はぼくがもつよ」と繰り返してくださるかもしれません。少なくとも、そうでないと信じる理由は何もありません。(同上、22 ページ)

It seemed in the end there was little else to do but actually to raise the matter again with Mr Farraday. There was always the possibility, of course, that his suggestion of a fortnight ago may have been a whim of the moment, and he would no longer be approving of the idea. But from my observation of Mr Farraday over these months, he is not one of those gentlemen prone to that most irritating of traits in an employer -- inconsistency. There was no reason to believe he would not be as enthusiastic as before about my proposed motoring trip -- indeed, that he would not repeat his most kind offer to 'foot the bill for the gas'. (Ibid, p. 12)

ここにも注目したい点があります。たとえば、原文の **There was no reason to believe** の部分を後ろにもって行って、「少なくとも、そうでないと信じる理由は何もありません」という独立した文にしています。この原文はいわば定型句ですから、すぐにも使える技法だといえるでしょう。「召使泣かせの最たるもの」という表現にも注目したいと思います。原文では **irritating** という言葉が使われています。英和辞典を引いて訳語を考えたのでは「いらいらさせられる」とか「怒らせる」とかの言葉しか出てこないはずですが。この物語の雰囲気をごわしてしまいかねません。「召使泣かせ」は原文の意味を過不足なく伝える見事な表現だと感嘆します。

もうひとつ、この部分で感嘆するのは、「気まぐれ」です。原文は **inconsistency** ですから、英和辞典には「不一致」とか「不調和」、「矛盾」といった訳語が並んでいるだけです。「気まぐれ」というのはこれらの訳語から思い切って飛躍しながら、原文

の意味を見事に伝える表現ではないでしょうか。また、inconsistency の前にあるダッシュを見事に処理していることにも注目しておくべきでしょう。ダッシュにはいくつかの使い方がありますが、ここでは強調のために使われています。土屋政雄は「召使泣かせの最たるもの、あの『気まぐれ』という悪癖」と表現して、まさに、「気まぐれ」を強調しています。

☆ ☆ ☆

以上のような例がどのページにもつぎつぎにあらわれてくるのをみていくと、翻訳の先輩から聞かされた教訓を思い出します。原文があるから翻訳は簡単だと思っている間は、まだまだ嘴が黄色い、原文があるから翻訳は難しいと実感できるようになれば、少しは成長したというのです。質の高い日本語が書けるというのは、翻訳者であれば当然のことであり、原文がなければ、あるいは原文を無視してもいいのであれば、いくらでも書けるのだが、難しいのは原文に忠実であると同時に、日本語として完成度の高い文章を書くことなのだというわけです。

最近では、「こなれた訳文」が翻訳の合言葉になっていますが、その結果、翻訳の大原則、基本中の基本が忘れられかねない状況にもなっていると懸念しています。「こなれた訳文」にすることを最優先にするのであれば、いちばん簡単な方法は、原文から離れることです。訳しにくい部分を削除するか、変えてしまえばいいのです。そのうえ、訳者か編集者が難しいと感じた部分（往々にして、肝心要の部分）を削ってしまえば、「読みやすく分かりやすい訳文」になります。読者がそれを望んでいるのであれば、こう申し上げておきましょう。誰でもそのように馬鹿にされるのを喜ぶはずがないと。

こうした風潮があるので、土屋政雄訳があくまでも原文に忠実であることを十分に認識しておくべきでしょう。翻訳というより、日本語で書いた小説なのではないかと思わせる文章だし、原文から思い切って飛躍しているからこそ、このように美しい日本語になるのだろうという印象をもたれるかもしれません。ですが、詳しくみていくと、飛躍しているのは、常識的な訳し方からであって、原文の意味はじつに忠実に伝えていることが分かるはずです。

こうもいえます。土屋訳の特徴は、原文の表面から思い切って飛躍することによって、原文の意味を

忠実に伝えていることだと。ここで「原文の表面」というのは要するに、幕末以降、150年にわたって、原文の忠実な訳し方として教えられてきた方法による訳です。たとえば、preoccupying my imaginationであれば、preoccupy は「先取する」や「占領する」など、my は「私の」、imagination は「想像」や「想像力」などだと考えて、訳語を適切に組み合わせたものです。われわれはこれが直訳だと教えられてきたわけですが、実際には、原文を直接に訳したのではなく、原文の表面を、表面だけを決めた方法でなぞろうとしたにすぎません。土屋政雄はこの方法をとらず、原文の意味をつかんで、それを忠実に、そして直接に日本語で表現しています。英和辞典の訳語にも、翻訳の常識にもとらわれず、原文の意味を直接に表現しているという点で、これこそが本物の直訳なのだといえると思います。

土屋政雄の翻訳は訳語ではなく、意味を考えたものだといわれても、ピンとこないという意見もあるはずですが、翻訳をするときに意味を考えるのは当たり前ではないかという意見です。幕末以来、150年間の英語教育と翻訳の伝統はきわめて根強いので、わたしたちは英文を読んだとき、個々の単語を目にして思い浮かぶ言葉が、じつは訳語にすぎないのであって、意味ではないことになかなか気づけなくなっています。たとえば、inconsistency という単語をみたとき、「不一致」、「不調和」、「矛盾」といった言葉が頭に浮かぶはずですが、これは英和辞典に並んでいる訳語であって、この語の意味ではないのです。意味はいってみれば、訳語よりもっと奥にあります。

訳語と意味の関係は何とも厄介です。まず、訳語は幕末以来、150年にわたって数多くの先達が意味を考え、それを日本語の語であらわすとすればどうなるかを考えてきた成果です。ですから、英和辞典に並んでいる訳語はたいがい、意味を考えてそれを日本語で表現する作業をかなりの程度まで省略できるようにしてくれるという点で、じつに便利なものなのです。反面、便利なものにはたいがい、思わぬ落とし穴があります。英和辞典に並んでいる訳語の場合、あまりに便利なために、意味を考え理解するという作業を必要であることすら、なかなか理解できなくなるという落とし穴があるのです。日本の英語教育はあらゆる単語の訳語を知っているが意味を知らない皮肉屋ばかりを育てようとしてきたともいえます。

また、便利な訳語があるために、出来合いの訳語以外の表現を考えるのがむずかしくなるといふ落とし穴もあります。辞書にある訳語以外の語を使うと非難されかねなかった時代が、つい最近まで続いていたほどですから。

もうひとつの大きな問題は、原文を単語のレベルまで分解し、それぞれに訳語をつけ、組み合わせるといふ方法に限界があることです。わたしたちがたたき込まれてきた英語学習法は 150 年ほど前、つまり 19 世紀後半に確立したものです。当時の原子論的な世界観を反映してこのような方法がとられているわけですが、これが正しい方法なのかどうか、じつはおおいに疑問があります。これは、『日の名残り』の冒頭にある「頭から離れなかった」といふ表現について触れた点です。ふつうは、つまりどう訳すかを考えることなく英文を読むときは、preoccupy、my、imagination という単語に分解してそれぞれの意味を考え、組み合わせるといふ方法はとっていない

ように思います。単語の単位ではなく、もっと大きな単位で意味を考える。翻訳にあたっては、そういう自然でふつうの方法をとって原文を読んでいけば、表現の幅が広がるはずですよ。

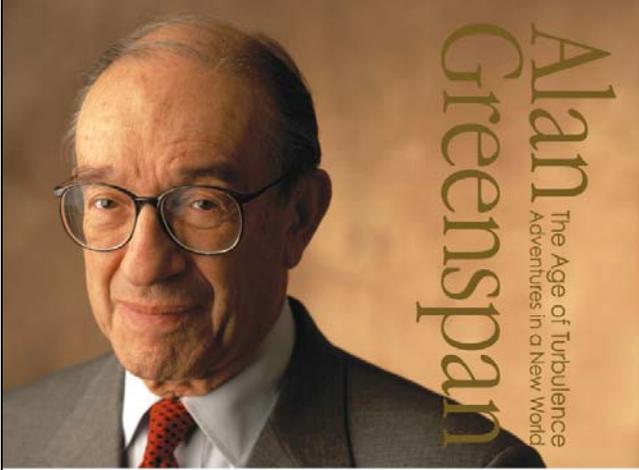
訳語の呪縛から抜け出すにはどうすればいいのでしょうか。方法はいろいろありますが、そのひとつが、土屋政雄訳の『日の名残り』のような名訳を、原文と比較しながらじっくりと味わうことです。自分ならどう訳すかを考えながら読んでいけば、思わぬ発見がどのページにもたくさんあるはずですよ。訳語の呪縛から抜け出して、原文の意味を深く味わえるようになるでしょう。

そして、土屋政雄の名訳を支えているのが、圧倒的な日本語力であることにも気づくはずですよ。翻訳といふと、外国語を使う仕事だと思われていますが、実際には何よりもまず、日本語を使う仕事なのです。

最新刊の紹介

[アラン・グリーンズパン著『波乱の時代』\(上\)](#)

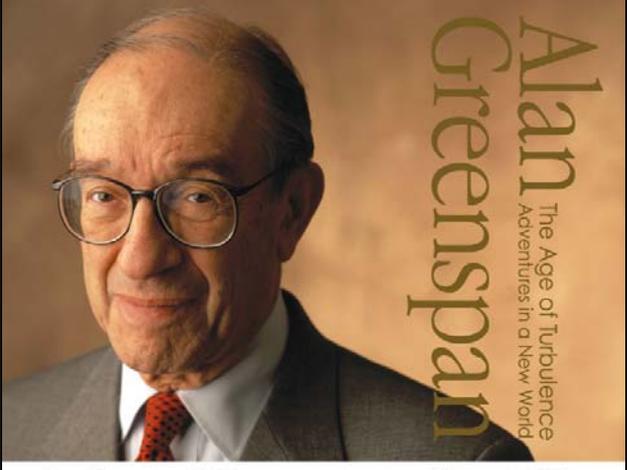
[アラン・グリーンズパン著『波乱の時代』\(下\)](#)



波乱の時代
——わが半生とFRB——
アラン・グリーンズパン
山岡洋一・高遠裕子訳

FRB議長、世界経済を動かす。
歴代大統領をしのぐ影響力。全米でベストセラー記録中の話題作

日本経済新聞出版株式会社 定価 2000円+税



波乱の時代
——世界と経済のゆくえ——
アラン・グリーンズパン
山岡洋一・高遠裕子訳

市場と国家の「これから」を語る。
中国の未来、教育と所得格差、金利の読み方、エネルギー問題……

日本経済新聞出版株式会社 定価 2000円+税